

開催地名	京都府大山崎町
開催日時	令和8年2月15日(日) 14:40 ~ 16:00
開催場所	大山崎町立老人福祉センター「長寿苑」
語り部	佐藤 裕香理(熊本県熊本市)
参加者	各地域の防災リーダー21名
開催経緯	防災に関する知識を地域へ普及するリーダー「防災伝道師」の養成講座を、令和元年度より実施している。これまでに66名が認定を受けており、現在は当該認定者を対象に、フォローアップ研修として災害の図上訓練を行うとともに、毎年度、防災意識向上プロジェクトとして語り部を招き講演会を実施している。
内容	<p>(1) すべての人を守る防災へ</p> <p>表題は「誰一人残さない防災」であり、インクルーシブ防災の視点を大切にしている。誰か一人でも取り残すと助ける側も一緒に危険に巻き込まれるため、早めの避難が重要になる。熊本地震から10年が経ち、当時高校生・中学生だった私の子どもたちは20代中盤となり、私に孫もできて守るべき家族が増えた。子育てが一段落して自分の時間が持てるようになった頃に防災講座の話が続けて舞い込み、同時に地震から7年経っても地域の防災が進んでいなかった現実に気づいた。自分の地域でも防災に関わるべきだという覚悟が固まり、声かけを始めてから防災に携わる機会が増えていった。</p> <p>消防団に加え、男女共同参画が主催する「くまもと女性防災リーダー育成講座」を受講し、一期生25人・二期生30人ほどの仲間と横のつながりができ、議員や教員なども含め刺激を受けながら活動している。自治会では、14町ほどが関わる校区防災連絡会があり、市職員3名も参加する防災に特化した連絡会に、個人名で加わっている。</p> <p>(2) 地域特性と防災課題</p> <p>私が住む画図校区は熊本市東区で、震源地の益城町から車で15分ほどの場所にある。地元の住民と区画整理で移り住んだ住民が6対4の割合で住んでおり、私も校区外から移住して6年ほどの段階であった。江津湖という大きな湖があり、水道をひねればミネラルウォーターと言われるほどきれいな水が湧く地域だが、土手が決壊すれば町が2メートル以上水に埋もれ、逃げ場がないため、そうなる前に避難するという意識が前提になる。高齢化も進み、65歳以上が4分の1を超え、自治会などで活躍する先輩たちの「昔はどうだったか」という話が、移住者にとって地域の特性理解に直結する学びになっている。世</p>

帯数は当時 5878 世帯、ファミリー層の多い市営団地 310 世帯、高齢者の多い
県営団地 500 世帯があり、特に県営団地は当時大変だった。

当時、画図校区ではイベントが多く、町内会・民生委員・PTA・おやじの会な
ど多世代と一緒に作り上げるため横のつながりが生まれ、PTA 役員経験を通し
てそのつながりを持っていた。水害で救助が必要になる状況を目の当たりに
し、江津湖もあふれる寸前だったことから、もし江津湖があふれたら誰が避難
所を運営するのかという疑問を持ち、女性のいない消防団に女性消防団を立ち
上げたところ、3 年後に熊本地震が起きた。

(3) 熊本地震の実態と避難所運営の課題

2016 年 4 月 14 日の 21 時 26 分と 4 月 16 日の 1 時 25 分に震度 7 を観測し、
前震と本震の 2 回、震度 6 以上は 7 回、余震は累計 4200 回超えとなった。家
屋倒壊、道路寸断、電気・ガス・水道の長期停止、携帯回線の不通が起こる一
方、LINE 通話はつながり、若い世代を中心に唯一の連絡手段になった。前震
時は仕事を終えて車で帰宅しようとしたところだった。県外にいた阪神淡路大
震災の経験がある上司に連絡し、橋やマンホール、倒壊の注意点を踏まえて恐
る恐る帰り、姑と連絡が取れず子どもを拾って迎えに行った。避難所へ向かっ
たが開いておらず、子どもの同級生の父親と一緒に鍵を開け、学校の先生や市
職員も合流して開設できたのはおよそ 1 時間半後だった。睡眠なしで動き回っ
たのち、家で就寝していたところ本震が来て停電し、地鳴りやサイレンの音が
続いた。

本震災日には避難所に人が押し寄せ、車中泊も含め最低 800 人規模となり、入
りきらない状態になった。炊き出しでは、室内に土足で入室していたために衛
生面で停止がかり、ボランティアの方たちがショックを受けて炊き出しが崩
壊した。スリッパや靴カバーなどの工夫が必要である。物資はパン 700 個、水
300 個、缶マフィン 70 個のみで到底足りず、トイレも階段の上の和式で高齢
者には厳しかった。持病の薬がない人にはガムテープで名札を作り、名前や薬
などを書いて身につけてもらった。避難所以外を回っていると血圧を心配する
声が多くあり、血圧計を持ち歩いて測りながら町内を回った。また、支援者名
簿など個人情報の扱いで共有できない状況もあった。物資は指定避難所にしか
届かず、公民館などの一時避難所へは運ぶ必要があり、横のつながりを活かし
て配送が回り始めた。避難所はあるものしかない中で、不満の声や「女がでし
ゃばるな」といった声が出ることもあり、男女が平等に運営することの大切さ
を実感した。

(4) 地域防災体制の再構築と今後の方向性

	<p>時間の経過で改善は進むが、避難所に行けば水や食べ物があると思われがち な一方、実際は最初の物資がわずかで、防災倉庫も100人が3日過ごせる程度 しかなく、20日間の長期では自助の備えが必要になる。熊本地震後に校区防 災連絡会ができ、市職員3名のうち2名が校区内在住で避難所の鍵をすぐ開け に行く体制へ変わった。要望で最も多かったのは吸水ライナーの尿取りパッド であり、トイレ問題と直結する。女性が運営に入る重要性を痛感したのであ る。</p> <p>熊本地震後、7年間進まなかった校区防災が動き始め、視察などを重ね地区防 災計画が策定された。私一人では行けないが、女性防災リーダーの横のつなが りがあったからこそ能登へもボランティアに行け、珠洲市第6団地の仮設で は、花を一緒に植えたり席替えをして話せる工夫をしたりしてコミュニティを 増やす取り組みを行った。</p> <p>震度7の地震が来たらどうするかについては、正解はないが、正解に近づける ことはできる。まず自分と家族の命を守ること、自分たちが助からなければ人 も助けられない。回覧板を回す隣組ほどの身近な範囲でも助け合えるというこ とを、自分が無事な状態で行うことが大切であり、助けられる側にならないよ うに「かもしれない」という想定をたくさん想像することが鍵になる。気づき を地域で共有し、みんなで持ち寄った「かもしれない」から困り事を見つけ、 地域に合った防災の答えへ近づけていくことが重要である。</p> <div data-bbox="466 1243 928 1585" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="954 1243 1417 1585" data-label="Image"> </div>
開催地より	<p>大山崎町では、地震の経験がないことから実際の体験談を聞くことができ、市 民の防災意識の面において刺激的で緊張感のある、有意義な機会であったと思 われる。</p> <p>また、防災を女性の視点で進めていく必要があるという点については、十分に 意識されていない部分でもあり、その視点を持つための良い機会であった。</p>